

特集

記憶と抵抗

——ラテンアメリカの民衆芸術

ラテンアメリカの民衆芸術への新しい視点 鈴木紀

米国への越境と移住を描く 本谷裕子

二世紀のクロニスタ(記録者) 細谷広美

路上で引き継がれるオアハカの野史 長崎由幹 清水チナツ





私の心を掴んで離さない国

いりやま あんな
入山 杏奈

私が初めてこの土地に降り立ってから、まもなく五年が経とうとしている。ここに来る前どんな場所なのか、どんな人たちが住んでいるのかも、何も知らなかった。それもそうだ。日本にはこの場所に関する情報があまりない。だが私はここに来てすぐにその魅力に心を奪われた。

この国について一言で表すことは難しいのだが、強いていうのであれば、温かい国。気温の話をしているのではない。気温は暑いイメージを持たれがちであるが、首都は富士山の五合目ほどの標高に位置し、昼間は暑く、朝晩は冷える。私の言う温かさとは人から来るものだ。街を歩いていると「そのバッグ可愛いわね、どこで買ったの？」と声をかけられ、家にお邪魔すれば「あなたの家のようにつるいで」と歓迎され、さっ

きカフェで知り合ったばかりの人だって、昔からの仲間のように接してくれる。日本で生まれ育った私にとって、赤の他人と会話する文化はとても衝撃的で、初めのうちこそ戸惑ったが、慣れてくると心地の良いものである。私は言語も知らずにこの土地に来たのにもかかわらず、この温かい人たちのおかげでホームシックに陥ることも一度もなく、毎日楽しく過ごすことができた。

他に魅力をいうのであれば、州によって全く別の顔を持つことである。華やかなリゾート地のビーチもあれば、昔ながらの雰囲気そのままに残した文化的に豊かな街もある。三五もの世界遺産があり、食も世界無形文化遺産に登録されている。さて、ここがどこだかお分かりだろうか。この

国の名前は、メキシコ。ええ、ええ。麻薬、ギャング、危険な国。きつとそんなイメージを持っていたのではないだろうか。私もその一人である。まさか自分がこんなにもメキシコを好きになるとは思ってもいなかったが、知れば知るほど底なし沼に嵌ま^はまっていく。今では私の人生を語るに於いて、絶対に欠かせない場所になった。意外にも成田・メキシコステイ間は直行便が飛んでいるので、ぜひ一度足を運んでいただきたい。

一点、愛くるしい欠点を挙げるのであれば、時間にルーズなことである。もしもメキシコでパーティーと呼ばれるようなことがあれば、開始予定時間から二時間ほど遅れて到着することをおすすめする。あなたが開始時間に到着すれば、きつとパーティーの主催者はドアを開けてこう言うであろう。

「今からシャワー浴びるところだけど、準備手伝いに来たの？」
そんなところも含めて、私はメキシコが大好きだ。

目次

- 1 エッセイ 千字文
私の心を掴んで離さない国
入山 杏奈
- 特集**
記憶と抵抗
——ラテンアメリカの民衆芸術
- 2 ラテンアメリカの
民衆芸術への新しい視点
鈴木 紀
- 4 米国への越境と移住を描く
本谷 裕子
- 6 21世紀のクロニスタ(記録者)
——新型コロナウイルス感染症の記録と
民衆芸術
細谷 広美
- 8 路上で引き継がれる
オアハカの野史
長崎 由幹
清水 チナツ
- 10 みんぱく回遊
変わりつつある遊牧文化
石山 俊
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
アレマに捧ぐ鎮魂歌
——サッカーとロックの熱狂
金 悠進
- 16 コレクションあれこれ
映像資料の成長
——徳之島の芸能関係映像資料
笹原 亮二
- 18 シネ倶楽部 M
法の隙間
——「パリ空港の人々」
三島 禎子
- 20 ことばの迷い道
ゴシップが生むもの
松井 梓
- 21 編集後記・次号の予告

表紙
マリオ・グスマンによる無償の壁画ワークショップの様子
(撮影:長崎由幹、メキシコ合衆国、オアハカ、2021年)

プロフィール
1995年生まれ。元AKB48メンバー。2018年にメキシコのドラマシリーズ「LIKE」に日本人キャストとして出演したことをきっかけにメキシコに移住。現在は、日本と行き来しながら女優、モデル、タレントとして活動。自身のYouTubeチャンネルではメキシコの文化や食などの魅力を発信している。



アウロラ・オルティス作 アルビジェラ《反テロリスト法に否を 2》チリ共和国、2015年制作(大島博光記念館蔵、撮影:六田知弘、六田春彦)チリの先住民族マプーチェの人びとをテロリストとして取り締まろうとする法律に異議をとなえる作品。アルビジェラは現在も社会批判のメディアとして制作されている

あふれる色とはじける形。2023年春の特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」では、民衆芸術を三つの意味でとらえ、さまざまな作品を展示する。本特集では、そのうちのひとつ「市民による批判精神の表現」としての民衆芸術に焦点を当て、制作者たちが作品に込めた思いを探る。愛らしい民衆芸術が、いかに暴力を記憶し、それに抵抗できるのか考えてみたい。

特別展

ラテンアメリカの民衆芸術

会期：2023年3月9日(木)～5月30日(火)

場所：特別展示館

ラテンアメリカの

民衆芸術への新しい視点

鈴木 紀

民博 学術資源開発センター

特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」は二〇二三年三月九日から五月三〇日まで開催される。民衆芸術とは、ラテンアメリカ諸国の主要言語であるスペイン語でアルテ・ポブラルとよばれる造形芸術の一ジャンルである。具体的には陶器、木彫、人形、仮面、織物、刺繍、絵画、版画、雑貨などが該当し、人びとの暮らしに役立つ生活用品からコレクター向けの装飾品まで多様な作品が含まれる。こうした作品は、現地ではアルテサニア(手工芸品)とよばれることもあるが、ラテンアメリカ諸国では、手工芸品の芸術性を強調する文脈で民衆芸術という名称が使用される。特別展ではラテンアメリカの一八カ国(地域)にわたる約四〇〇点の作品を展示する。

民衆芸術の三つの意味

特別展のねらいは、ラテンアメリカの民衆芸術の多様性を示すことにある。そのため、現地で使用されている民衆芸術概念から三つ

の意味を抽出し、展示を構成した。第一の意味は「諸文化の伝統的な造形表現」である。コロンブスの航海以降、インディヘナ(先住民族)の文化と旧大陸からの移住者の文化が出会い、複雑な文化混雑が生じた。こうして形成されたラテンアメリカの諸文化のなかには、独自の造形表現をばぐくんでいるものが多い。

第二の意味は「国民の芸術」である。二〇世紀前半からメキシコとペルーの政府は、ナシヨナリズムを高揚する手段として手工芸品に着目し、それを民衆芸術とよんで振興してきた。この政策は功を奏し、両国では国際的な評価が高い、優れた作品が生み出されている。

民衆芸術の第三の意味は「市民による批判精神の表現」である。ラテンアメリカでは、一九七〇年代の軍事政権、八〇年代の債務危機、九〇年代以降の新自由主義経済による格差の拡大などを背景に、民主化や人権尊重を求める社会運動が盛んである。それに伴い、暴力の記憶の風化をくい止め、権力による弾圧に抵抗するための戦略として、政治的な作品が制作されるようになった。民衆芸術は、いわば「記憶と抵抗」のためのメディアとして機能している。

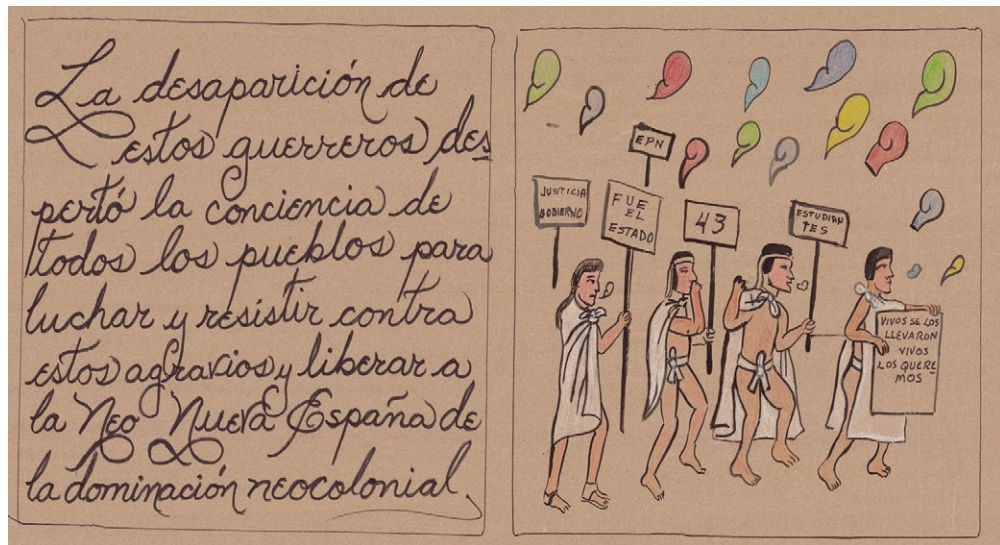
アルビジェラとアヨツィナパ文書

本特集では、民衆芸術の新しい用法ともいえる第三の意味に焦点を当てる。特別展示場では、全五章のうち第四章に当たる部分である。おもな展示作品として、ここではチリのアルビジェラとメキシコのアヨツィナパ文書を紹介する。

チリでは、一九七三年の軍事クーデターで権力を掌握したピノチエツト政権の下、人権弾圧により多くの市民が死亡もしくは行方不明になった。これに対して犠牲者の家族や都市の貧困層のあいだで制作されたのがアルビジェラというアップリケ画である。これにより言論統制下でも、市民に向けられた暴力を記憶することが可能になり、作品の販売を通じて制作者の不安定な収入が補完されることになった。一見、かわいらしい手芸作品ではあるが、描かれている内容は重い。

アヨツィナパ文書は、二〇一四年九月二六日にメキシコ、ゲレロ州で発生した学生四三人の失踪事件の真相究明を求めて制作された作品である。事件には権力者と複雑な利害関係にある勢力が関与しているとみられ、八年以上たった現在も解決をみていない。先コロンブス期に由来する絵文書のスタイルを借りて、現代の権力による暴力を、歴史的に繰り返された征服者による先住民族への暴力の系譜のなかに位置付けている。

その他、本特集では、特別展の第四章で展示する、メキシコからアメリカ合衆国への危険な移住の旅路を描いた刺繍画、新型コロナウイルス感染症蔓延時の社会的混乱を描いた



ファン・マヌエル・サンドバル・バラシオス、ディエゴ・サンドバル・アビラ作《アヨツィナパ文書》(部分)メキシコ合衆国、2014年制作(提供:ファン・マヌエル・サンドバル・バラシオス、アン・スレンチカ)全15頁中の最後の2頁。左頁には「戦士たち(学生たちをさす)の失踪により、こうした不法行為と戦って抵抗し、新しい新スペイン(新スペインは植民地時代のメキシコの名称、新しい新スペインは現代のメキシコをさす)を新植民地支配から解放しよう、すべての人びとは覚醒した」と書かれている
El Código de Ayotzinapa
Courtesy of Juan Manuel Sandoval Palacios and Anne Slenczka

ペルーの線画とその作者エディルベルト・ヒメネス、およびメキシコのオアハカ市のストリートアートとそれを支える版画運動について紹介する。

米国への越境と移住を描く

ほんや ゆうこ
本谷 裕子

慶應義塾大学教授

メキシコ、オアハカ州のサンフランシスコ・タニベ村を訪ねて

メキシコ南部の太平洋岸、テワンテペク地峡の南西に位置するオアハカ州。毎年七月末に開催される伝統舞踊の祭典「セラゲツツア」やメキシコ版のお盆に当たる「死者の日」の儀礼など、州都オアハカ市は年間を通じて国内外からの観光客が絶えることのない人気の観光地である。極彩色の建物が連なるオアハカ市を抜け東に向かう街道を、車で四五分ほど行ったらところに、人口二五〇人のサンフランシスコ・タニベという小さな集落がある。何もない渾身の大地



集落の中心を貫くメインストリート。日中にもかかわらず、通りを歩く人の姿は見られない(メキシコ合衆国、サンフランシスコ・タニベ、2022年)

のなかで、「ここがタニベの入口だ」と告げられ乗り合いタクシーを降りると、目の前にこの集落を縦断する真つすぐな一本道が伸びている。道の両脇には住民の家、小学校や教会、日用品を売る小さな店などが点在するが人の気配はなく、放し飼いの牛たちが道端の草を食んでいるだけである。予め告げられていた番地を探しながら人気のない道を歩く。家主の名はフアナ、未亡人の彼女の家には広い庭とコンクリート造りの平屋の家屋、作業場と思われる広いガレージがある。庭には番犬とえさをついばむニワトリたち、ガレージの隅の祭壇にはメキシコの守護聖女のグアダルペ像やマリア像が祀られている。敷地内の隣の家には娘のホセフィーナが二人の子どもと暮らしており、彼女の夫はいま米国のロサンゼルスにいるのだという。

アート集団「タニベ刺繍アリたち」

フアナが携帯電話で連絡すると、彼女の家へと近隣の女性たちが集まってくる。この集落でアート集団「タニベ刺繍アリたち」(Las Bordadoras hornigas [anivet])を結成する人びとである。タニベという集落の名が先住民言語のサポテカ語で蟻塚を意味することにちなみ、彼



タペストリー右上には、国境の巨大な壁を越えられずにいるメキシコ人男性と、彼の心のうちをあらわすセリフ「神よ、この壁を越えて合衆国(米国)へとたどり着けるよう、私を助けてください」が、パッチワークと手刺繍であらわされている

と移住である。オアハカは非合法に北の国境を渡る人の数が多い州であり、米国への越境と移住が社会的にも経済的にも地域全体に極めて大きな影響をおよぼしている。家庭内の収入が足りないために人びとは越境せざるを得ないので、フアナは語る。タニベの男性たちは

成年に達すると、家族の生活を養うためにとニューヨーク(案内人)の手引きで米国へ不法入国し、工事現場の日雇い労働などで得た収入をメキシコの家族のもとに送金する。オルミーガスの誰もがこうした越境や移住の物語を経験している。近年は、安定した収入を得ようと命の危険を冒して米国へ渡ろうとする女性たちも少なくない。

越境するオルミーガス

タニベに残された女性たちは二〇一〇年からこのアート活動を開始した。キュレーターのマリエッタ・ベルンシユトルフ氏のサポートを得て、オルミーガスは刺繍やパッチワークや織物などの講習を受け、手仕事のわざを学んだ。現金収入源の製品づくりを目的として発足したこのプロジェクトは、その後オルミーガスのクリエイティブな才能を発信するものへと変容し、ベルンシユトルフ氏は英国や米国、メキシコ市など国内外の美術館やギャラリーでの展示会を企画・開催した。二〇一四年八月にはギャラリーの招



タペストリー左上には、オルミーガスたちが合法的なやりかたで上陸し入国を果たしたロサンゼルスの様子が描かれている。富と繁栄をあらわす象徴として使われている米国国旗が印象的である



タペストリーの下半分には、タニベの様子とそこに暮らす人びとの姿が描かれている。右下には集落の名の由来となった蟻塚とアリの姿が見られる

聘を受け、オルミーガスはパスポートとビザを取得し、空路で、タニベ出身の非合法な移住者たちが暮らす米国西海岸のロサンゼルスへと上陸した。何にも代えがたいこの成功経験は、その後メンバー全員力を結集して創られた大き

なタペストリーへと姿を変えた。その大作にはタニベの日常、国境の高くて大きな壁、米国への空路の旅、巨大都市ロサンゼルスの様子など、越境と移住をめぐるあらたな経験が溢れんばかりの喜びとともに描かれている。



2014年に米国西海岸のロサンゼルスで開催された展示会を記念して、オルミーガス全員で創ったタペストリー。製作には半年以上を要したという(メキシコ合衆国、サンフランシスコ・タニベ、2022年)

二一世紀のコロナニスタ(記録者)

— 新型コロナウイルス感染症の記録と民衆芸術

ペルーでは新型コロナウイルス感染症による人口当たりの死者数が一時期世界最大となり、クスコ市長として対策に当たっていた人類学者リカルド・バルデラマ博士をはじめ、旧知の方たちの訃報が次々に伝えられた。そうしたなか、芸術家兼ジャーナリストのエディルベルト・ヒメネスさんから一冊の本が届いた。ヒメネスさ



工房で作業をするヒメネスさん(ペルー共和国、リマ、2022年)

んは過酷な状況下で、国内各地(海岸部、山岳部、アマゾン)を歩き、人種、民族、言語、階級、自然環境、価値観、生活習慣などが異なる多様な背景をもつ市井の人びとの経験を聞き、それを証言と証言に基づく線描画からなる作品にした。

アンデスの民衆芸術レタブロと紛争

ヒメネスさんはインカ帝国の公用語であったケチュア語話者の村出身で、国立民族学博物館にも作品が所蔵されている著名なレタブロ作家の故フロレンティーノ・ヒメネスさんを父とする。レタブロは元来はキリスト教の携帯用祭壇として制作されてきているが、一九四〇年代ごろからインディヘニスマ(先住民主義運動)の影響の下、アンデス世界の日常や祭りを扱った作品が制作されるようになり、現在はペルーを代表する民衆芸術となっている。一九八〇年にアヤクチャ県で毛沢東系の反政府組織が武装闘争を開始したことではじまった紛争下、ヒメネスさんは先住民への暴力をテーマにしたレタブロ作品を複数制作した。紛争下では政府軍や警察による拉致や拷問、殺害が頻繁に起こっていた

ため、それらの作品はヒメネスさんの身の安全のために、人類学者の故カルロス・イバン・デグレゴリ博士によって、ペルー研究所(IEP)内に保管されていた。現在、作品は、紛争時代を記憶するために各国の支援を受けてリマに建設された博物館「記憶、社会的寛容と包摂の場(LUM)」に展示されている。

細谷 広美

成蹊大学教授

『新しいコロナウイルスと良き政府』

作品集のタイトル『新しいコロナウイルスと良き政府(Nuevo Coronavirus y buen gobierno)』(IEPほか、二〇二一年)は、ポマの記録を振っている。ペルー政府は早々に非常事態宣言を発令し外出を制限した。しかし、外出禁止



外出を禁止するため警察や軍が出動した。装甲車や兵士の姿は紛争時代の戒厳令を想起させた Toque de queda, p. 25



紛争時代に都市に流入した国内避難民を含む移民たちは何百キロもの道のりを徒歩で帰還する命がけの旅をはじめた Obligan a muchísimas familias a retornar a sus lugares de origen, p. 77



外出禁止により収入源を絶たれ水も食料も尽きた人びとは白旗をあげ助けを求めた Telas blancas, p. 119



国会議事堂の前で大規模なデモがおこなわれた。インカの神である太陽と月が泣いている ¡Esto no es un país, es una fosa común con himno nacional! p. 229



エディルベルト・ヒメネス作 《ワマンガ女性の夢——アヤクチャの8年》(部分) ペルー共和国、1988年制作 LUMに展示されたヒメネスさんのレタブロ作品(リマ)

の徹底は、日銭を稼いで暮らす貧困層の人びとの生活を直撃した。ステイホームが可能だったのは限られた層であり、先住民系を中心とする貧困地区の人びとを水不足や飢餓が襲った。ある写真家は次のように語っている。「ウイルスは、私たちにとって当たり前となってしまった社会的・象徴的分断を暴きました。デモで目にした『これは国家ではない。国歌が響く集団墓地だ!』という言葉が、それ以来私の頭の中でマントラのように鳴り続けています。悲しいことにそれは真実です」。

作品は作家スヴェトラナ・アレクシエヴィチのように市井の人びとの声を伝える。一方で、大航海時代以降大規模な人類の移動が起こったラテンアメリカにおいて、「市井の人びと」は「同じ国民」であつてもまるで世界を凝縮したかのように多様である。ヒメネスさんは「二一世紀のコロナニスタ」として独自のドキュメンテーションの方法を模索している。

一九八〇〜二〇〇〇年に起こった紛争の犠牲者約七万人のうち、七五パーセントは先住民の人びとであった。ヒメネスさんはバイリンガルであることを生かし、真実和解委員会やNGOによる調査、平和構築に参加してきた。そして、チュンギ地区での調査をもとに、証言とそれに基づくレタブロの筆致を残す線描画がセツトになった作品を制作し、作品集『チュンギ——暴力と記憶の痕跡』(IEPほか、二〇〇九年)を出版した。ケチュア語とスペイン語という分断により、先住民の人びとの紛争経験に関する情報が少ないなか、同書の出版は衝撃を与えた。作品は一七世紀初頭に文章と線描画を通じて、植民地体制下の不正をスペイン国王に告発しようとした記録者(コロナニスタ)、ワマン・ポマ・デ・アヤラの『新しい記録と良き政府(Primer nueva crónica y buen gobierno)』を彷彿とさせた。様式上の類似性にとどまらず、先住民の人びとに対する不条理な暴力を記録し伝えていくためである。

路上で引き継がれるオアハカの野史

ながさき よしと
長崎 由幹

映像技術者 / PUMPOUKES

しみず
清水 チナツ

インディペンデント・キュレーター / PUMPOUKES



マリオ・グスマンによる元大統領の不正を訴えた巨大版画(撮影:長崎由幹、メキシコ合衆国、オアハカ、2021年)

わたしたちは東日本大震災のアーカイブプロジェクトで出会い、被災地で見られたいわゆる災害ユートピア的な状況に励まされ、その意味を確認しながら活動してきた。災厄は社会の矛盾や限界を露見させ、誰もが「ほんとうに大事なものはなにか?」「戻るべき日常とはどんな日常か?」を切実に問うていた。しかし、復興の大きなうねり(政治的な意味も含む)のなかで、市民の自律的で細やかな活動は下火になり、立ち止まって考えることは許されず、うやむやな行き場のない感覚だけがあとに残された。オアハカへたどり着いたのは、そんなときだった。わずかな情報と勘を頼りにメキシコを放し、南部のオアハカで目にしたのが、路地に貼られた巨大な版画群だった。以来、その光景が忘れられずにいたわたしたちは二〇二〇年三月から一年半、オアハカに滞在し、版画運動を追いかけた。

路地にあらわれた版画群 / 開かれた工房

オアハカ版画運動は、二〇〇六年に州政府に対し市民が起こした大規模抗議運動に端を発す。そのまま引き継ぐというよりは、そこに集う人や場に応じてブレるし更新される。そして、その運動は、経験されることにより、「物」ではなく「人」に刻まれるのだ。その先に、オアハカのような自律的で寛容で、文化が活性化し景色が広がっている。

パンデミック下でも、路上の巨大版画は、日々、更新されていた。そして、タジェールの扉は開き、いつでも人を迎え入れた。アーティストたちがあまりにも活発で、一連の活動が記録されないことを惜しく感じることもあった。しかし、彼らに併走するうちに、「アーカイブを残すこと」より、そこに「身を投じること」の方が具体的な継承につながる感じた。記録物を残すよりも、実践のなかで継承していく。それには、自身で課題にコミットすることがつきまとうので、オリジナルをその



互いに技術や知識を補い、助け合いながら表現し続けている(撮影:長崎由幹、メキシコ合衆国、オアハカ、2020年)

る。オアハカの美大生を中心に結成されたオアハカ革命芸術家集会(A S A R O)が市民に連帯する版画を制作し路上に貼り始めたのだ。以後、彼らは街中にタジェール(工房)をそれぞれ立ち上げていった。現在、路上に版画を精力的に貼るコレクティブ(共通の目的を達成するために協働するアーティスト集団)はA S A R O出身のマリオ・グスマンが無償で提供するワークショップを受けた若者たちだ。版画のモチーフは、農夫や、家長長制に抗議する女性たち、かつてインディヘナの為に戦った革命家エミリアーノ・サパタなどさまざま。そして、彼らはそれらを指して「私たちの姿を描いている」と語る。「私たち」とは、それらを描いたアーティストであり、路地を往来する民衆たちだ。彼らは差別やそれに伴う貧困で周縁に追いやりられ、ともすれば容易に隠匿される存在でもある。しかし、オアハカの人びとの時代や世代を超え連帯する感性が後ろ支えし、等身大以上の版画となった「私たち」は、街中のいたるところに姿をあらわす。

版画というメディア / コレクティブでの制作

都市を歩けばイメージは光り動き出す。広告に代表されるそれらは観る者の思考を求めない、いたって一方的なメディアだ。版画はその対局にある。モノクロで構成された素朴なメディアは、表象されたものと自身との差異よりも、類似点を発見させ、観る者の心を受け反射する。また、その一筋一筋の彫跡は作り手の存在を示



オアハカの美大で版画の指導にあたる竹田鎮三郎氏が保管する2006年の抗議運動の版画(撮影:長崎由幹、メキシコ合衆国、オアハカ、2020年)



タジェールに並べられた大判の版木とプレス機(撮影:清水チナツ、メキシコ合衆国、オアハカ、2021年)

「テントを張った遊牧民に会うことができるか?」。淡い期待をもってアルジェリアのサハラを初訪問したのは二〇〇九年のことであつた。だが、その期待はかなわなかつた。数十頭のラクダの群れを見かけることはあつたが、遊牧文化はすでに過去のものとなりつつあることを思い知らされたのであつた。

遊牧テントの知恵

民博の西アジア展示では、ヨルダンで収集された、遊牧文化の象徴であるテントを見ることのできる。一張りのテントは女性空間と男性空間に区切られ、女性空間には調理道具、男性空間には客人をもてなすためのコーヒードリフトなどが展示されている。この空間構成が、中東からサハラへと連なる乾燥地域の遊牧移動文化に共通する基本形態となる。

テントの材料に目をむけてみよう。上面(屋根)と側面(壁)の材料はヤギの毛、下に敷かれた絨毯の材料は羊毛である。ヤギの毛で織られた布の特徴は、重いうえに手触りが粗いが、水をはじく防水性に優れていることにある。羊毛で織られた布の特徴は、吸水性はあるが手触りがなめらかなことである。つまり、雨を避けるための材料、快適に座る、寝るための材料がうまく使い分けられているのである。ヤギの毛であれ羊毛であれ重量がかさむことには変わりはない。だが、移動の際にはテントと家財道具一式をラクダに積むのでそれほど問題にはならない。これに



木陰で休息する老牧夫。放牧中の数週間は簡単な生活用具のみで過ごす。寝る場所も屋外であるという(アルジェリア、2010年)

また、遊牧という生活様式は消えつつあるが、ラクダをはじめとした牧畜を生計の一部とする人びとはまだいる。サウジアラビアのワディ・ファアティマ・オアシスでは、舎飼いでヤギ、ヒツジ、ラクダが飼われている。

アルジェリア・サハラでは、オアシス都市・集落に居をさだめた遊牧民が、家畜をなお所有し、数週間の放牧生活をおこなうこともある。そこにはかつての遊牧生活のなごりを見ることができるといわれる。サハラで出会った老牧夫は、灌木の小さな陰で昼の憩いをとっていた。一〇〇キロメートルほど離れたオアシス都市から一〇頭あまりのラクダを連れ、一人つきりで数週間の放牧に出ているという。彼の持ち物は、必要最低限の食料、お茶、それらを入れる容器のみであつた。「一人で放牧をしているのになぜお茶を入れるコップがふたつあるの?」というわたしの問いに対して、「いつでも人を迎えられるようにだよ」と放つた老牧夫のこたえは、遊牧生活を知る者だけにゆるされたことばなのかもしれない。

みんぱく回遊

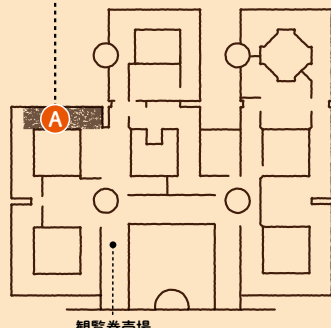
変わりつつある遊牧文化

いしやま しゅん
民博プロジェクト研究員
石山 俊



A テント(ヨルダン、H0229073ほか)

西アジア展示 「砂漠のくらし」



観覧券売場
本館展示場

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

普段着のラクダ

民博の西アジア展示では、ラクダの装身具も多数見ることができ。着飾ったラクダは、その風貌とあいまって家畜が有する美しさを存分に示している。ただ、わたしがこれまで出会った放牧ラクダは、展示で見られるものとはかけ離れていた。装身具もななく野に放たれたラクダは、はつきりいえず「汚い」(わたし自身はそのなかにも家畜の美を見出している)のである。そのようなラクダでも人を乗せるための鞍や織布を載せると凛として見違える。保有する群れを連れ戻すために一人砂漠を進む若い牧夫が操るラクダには、鞍、織布のほか水汲むためのポウルが吊るされていた。こうした「実用美」こそが、生きるための遊牧文化を象徴しているのだとわたしは思っている。

遊牧文化のなごり

遊牧民の定住化と近代的建築資材の普及によって、移動性に優れ、かつ自給が可能な材料を利用するテントの実用的役割はすでに失われている。とはいえ、現代においても遊牧テントは観光・レジャー資源として活用されている。サウジアラビアの港湾都市、ジッダ近郊には、多くの観光・レジャーキャンピングサイトが見られ、区画ごとにテントが建てられている。都市に住む人びとは、このキャンピング場において、夜の飲食を楽しむのである。これらのテントからは、実用品としての魅力が失せてしまっているのは仕方がないことであろうか。



サウジアラビア、ジッダ郊外に建てられた娯楽・観光用の遊牧テント。民博のテントと異なり、男女空間の仕切りはなく、入口の脇には大型テレビが設置されている(2019年)



A 装具をつけたラクダ
(ヨルダン、H0229047ほか)



ラクダの群れを迎えに行く牧夫。群れの頭数は20頭程度であるという。わたしたちと会話を交わした後さっそうと出発した(アルジェリア、2011年)

特別展
「ラテンアメリカの民衆芸術」
ラテンアメリカの歴史と諸民族の文化を反映した民衆芸術の展覧会です。あふれる色とほじける形、驚異的な創造力と鋭い批判精神をご鑑賞ください。
会期 3月9日(木)～5月30日(火)
会場 特別展示館



木彫(ヤギのナワル) メキシコ合衆国
(撮影:六田知弘、六田春彦)

座談会 森見登美彦(作家)×西尾哲夫×山中由里子
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます(定員300名)。
主催 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
※事前申込制(定員に達し次第受付終了)、先着順、参加無料
※手話通訳あり
お問い合わせ先
第40回人文機構シンポジウム事務局(千里文化財団)
061687718893



みんなくミュージアムパートナーズのワークショップ
「点字体験ワークショップ」
日時 3月11日(土)
12時～15時30分(15時受付終了)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、随時受付
巡回路
「驚異と怪異」
——想像界の生きものたち——
会期 3月11日(土)～5月14日(日)
会場 福岡市博物館 特別展示室
「ユニバーサル・ミュージアム——さわる！ 触！の大博覧会」
岡山巡回展2023
2021年秋に本館で行われた特別展の初の巡回展を岡山で開催します。展覧会を通して「さわる」「触」ことの無限の可能性を探ります。
会期 4月1日(土)～5月7日(日)
会場 KURUNHALLクルンホール・KURUNラウンジ
(岡山市北区下石井)
主催 OHK岡山放送
共催 国立民族学博物館

重要なお知らせ
新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら
みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event>



◆関連イベント
研究公演
「ペルー・アンデスの民衆の歌」
ペルー南部のアヤクチヨ県出身の歌手イルマ・オスノがアンデスの民衆の歌を歌います。共演はアンデス音楽と現代音楽を演奏するギタリストの笹久保伸。日本では聴く機会の少ないペルー・アヤクチヨ地方のアンデス音楽をお届けします。
日時 4月22日(土)14時～15時40分(13時30分開場)
会場 みんなくインテリジェントホール(定員400名)
出演 イルマ・オスノ
(ペルー・アンデス地方の歌い手) 笹久保伸(ギタリスト)
解説 細谷広美(成蹊大学 教授、オンライン登壇)
司会 鈴木紀(本館 教授)
※事前申込制(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前申込の方へ入場整理券を当日

みんなくゼミナール
※事前申込制(先着順)、参加無料
第531回
3月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
民衆芸術
——ラテンアメリカの人びとの創造力と批判力
講師 鈴木紀(本館 教授)
会場 本館第4セミナー室他(定員180名)
※4セミナー室が定員に達し次第、第5セミナー室へご案内します。
※当日参加受付あり(定員36名)
【申込期間】
■一般受付 3月15日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第532回
4月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
記憶と抵抗のメディアとしての民衆芸術
講師 鈴木紀(本館 教授)
酒井朋子(京都大学 准教授)
細谷広美(成蹊大学 教授、オンライン登壇)
山越英嗣(都留文科大学 准教授)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員400名)
※当日参加受付あり(定員80名)
【申込期間】
■友の会先行予約
3月13日(月)～17日(金)(定員80名)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付 3月20日(月)～4月12日(水)

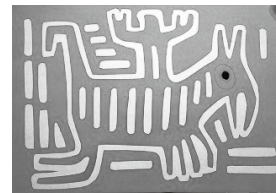
みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう
会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
3月12日(日)14時30分～15時
海を渡った一族
——沖縄の座間味島をめぐる移動史
話者 藤本透子(本館 准教授)
3月26日(日)14時30分～15時15分
イタリアの食の博物館
話者 宇田川妙子(本館 教授)
4月2日(日)14時30分～15時
メキシコ絵画と民衆芸術
話者 鈴木紀(本館 教授)

11時から本館2階会場入り口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
■友の会先行受付
3月13日(月)～17日(金)、定員80名
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
3月20日(月)～4月14日(金)
11時から本館2階会場入り口にて配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
■友の会先行受付
3月13日(月)～17日(金)、定員80名
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
3月20日(月)～4月14日(金)



上:イルマ・オスノ(ペルー・アンデス地方の歌い手)
左:笹久保伸(ギタリスト)

作します。動物や植物、幾何学模様をモチーフにした色あざやかなモラは、リバースアップリケという技法で作られます。ワークショップでは色紙を用いてモラのデザインに挑戦します。
日時 4月8日(土)、5月3日(水・祝)
会場 本館第3セミナー室、特別展示場(各回定員13名)
講師 鈴木紀(本館 教授)
対象 小学生以上(小学3年生以下は保護者同伴)
参加費 500円(大学生・一般の参加者は要特別展観覧券)
※事前申込制(3月9日(木)～定員に達し次第受付終了)
※申込フォームまたは往復はがきにて1通につき2名まで応募可能。
【申込期間】
3月23日(木)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※手話通訳あり



色紙を用いて制作したモラ
(完成イメージ)

お問い合わせ先
本館研究協力課研究協力係
0616877818209
【お話し】
2月号本欄に掲載した電話番号に誤りがありました。右記のとおり訂正いたします。
人間文化研究機構プロジェクト
関連シンポジウム
「写真家・井上隆雄の視座を継ぐ——仏教壁画デジタルライブラリと芸術実践」
日時 3月12日(日)13時～17時(12時開場)
会場 シンポジウム会場
本館第4セミナー室(定員50名)
展示会場
本館第3セミナー室(10時～17時)
【申込期間】
3月7日(火)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
お問い合わせ先
本館研究協力課共同利用係
zkouranke@minpaku.ac.jp
第40回人文機構シンポジウム
「人類妄想進化論——文学はいかに地球社会を共創するのかわ？」
文学と地域研究をテーマに、わたしたちはどこのように地球社会を共創していくのかを考察。京都に縁の深い作家 森見登美彦氏とともに「妄想が人類を進化させたか」と題して座談会を行います。
日時 3月25日(土)13時～16時(12時30分開場)
会場 京都府立京都学・歴史館(定員200名)
講演 西尾哲夫(本館 教授)
山中由里子(本館 教授)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会
お申込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。
友の会講演会
参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円
※事前申込制(先着順)
※会員は会場参加の場合、事前申込不要
第534回 3月4日(土)13時30分～15時
中国における宗教と風紀
——回族によるアルコール排斥運動の展開
講師 奈良雅史(本館 准教授)
中国において宗教活動は政府の管理統制下にあります。こうした状況下、イスラーム系

少数民族の回族は、状況に応じて中国政府の社会政策を部分的に取り入れながら、宗教活動を展開してきました。本講演では、回族によるアルコール排斥運動の事例から、多義的なものとして立ち現れるイスラーム的な風紀のあり方に迫ります。
第535回 4月1日(土)13時30分～15時
「巻き貝の神官墓」は語る
——南米アンデス文明、成立過程の解明に迫る
講師 関雄二(本館 名誉教授)
南米アンデス文明の成立過程の解明は、日本人研究者が過去65年にわたって取り組んできた課題です。昨年、ペルー北高地のラカピヤ遺跡で、この課題解明に迫る「巻き貝の神官墓」の発見があり、国内外で大きく報道されました。今回の講演では、この墓の特徴や研究上の意義について紹介します。

東京講演会
友の会会員:無料、一般:500円
※事前申込制(先着順、定員40名)
※オンライン配信はありません。
第133回 4月29日(土・祝)13時30分～15時
インド洋西海域の奴隷制と奴隷交易
講師 鈴木英明(本館 准教授)
会場 モンベル御徒町店4階サロン(東京都台東区上野3-22-6 コムテラス御徒町)
「奴隷」と聞いて、どのようなイメージが頭に浮かぶでしょうか? 奴隷が王様になるのは夢物語でしょうか? いいえ、そうではありません。この講演では、インド洋西海域の奴隷交易と奴隷制について、現在に残る痕跡にも目を配りながら、過去と現在を往還しつつ考えていきたいと思います。

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



アレマに捧ぐ鎮魂歌 ——サッカーとロックの熱狂

金悠進
民博機関研究員



東ジャワ州第二の都市マランは、わたしがインドネシアで好きな街のひとつだ。涼しくて過ごしやすく、都会すぎず、ちょうどいい。そんなマランの郊外で悲劇が起きた。二〇二二年一〇月一日、サッカーの試合で観客が暴徒化し、鎮静化を図った警察の催涙弾と暴力な

ど過剰警備により群衆雪崩が起き、一三〇人以上が窒息死・圧死した。暴動後の現場に散在する石を見て、「ああ、ここはマランだ」と思った。
同国は熱狂的サッカーファンが多いことで有名だが、特にマランの熱狂ぶりは凄まじい。フリーガンさながらで恐



インドネシア音楽博物館が保存している音楽雑誌、レコードの一部(2018年)

怖すら感じる。住民たちのなかで、地元チーム、アレマFC(アレマは「アレック・マラン」マランの子)に由来する)のサポーターは「癡猛だ」というステレオタイプなイメージすらある。

アレマの文化史 ——熱狂的ロックファン

マランの若者たちは、サッカーだけでなく、ロックも大好きだ。マランは同国では有名なロック都市として知られ、熱狂的サポーターがいる。特に一九七〇年代、マランはロック・シーンの重要拠点として繁栄した。

わたしはマランの「インドネシア音楽博物館」を訪れたことがある。館長のヘンキは、一九七〇年代のロック雑誌『アクトウイル』の写真記者として働いていた人物である。マランの若者たち



館長のヘンキとレコードについて会話するわたし(右)
(同館スタッフ撮影、2018年)

ロック都市を訪れてみました

にインドネシアの音楽を知ってもらいたいと、音楽愛好家たちの寄贈を頼りに、二〇〇九年、国内初の民間音楽博物館を設立した。これまで音楽博物館といえは国営の「ロカナンタ」(スラカルタ市)だけだった。インドネシア音楽博物館は教育を目的とし、一九七〇年代のマランの伝説的ロックバンドのレコード、カセット、雑誌など貴重な資料を大量に保存・一般公開している。同館の活動を評価し、政府やユネスコも支援に乗り出した。わたしの訪問中も副市長が視察に訪れていた。書棚を見ると、マランの学生が実際に同館に通って執筆した、マランのロック史に関する論

文がある。

同館関係者によると、一九七〇年代、マランはロック・シーンのバロメーターだったという。首都ジャカルタで人気絶頂のロックバンドですら、マランでライブすることを恐れた。もしダサい演奏をすれば、聴衆が野次を飛ばし、石を投げ、椅子を解体して部品をステージに投げ込むなど暴れまくるからだ。当時、マランで有名な大男がいたらしく、彼の周りにはいつも人だかりができていた。この屈強な男がこのバンドはダサイと判断し物を投げ始めると、その周りに群がる聴衆も彼に続いて物を投げまくっていたと、同館スタッフは笑いながら話した。

は、愛するロックとサッカーを優しく見守る側面もある。
マランのロック・シーンを支えたのは、サッカーだった。サッカー・スタジアムでロックフェスが開催され、サッカーの試合の実況担当者が、ロックフェスの

MCとして会場を盛り上げたという。さらに、一九九〇年代にはアレマFCをサポートするロックバンド「アレマの声」が人気を博した。地元チームを応援する「サポーターバンド」の先駆者だ。「マラン駅に行けば『アレマの声』がい

るよ」。そう聞きつけて駅に向かった。毎週この駅のホームで、バンドメンバーは、列車を待つ地元市民に憩いの時間を提供するため、無料ライブをしている。誰もが思わず口ずさみたくなる往年のヒット曲のカバーを中心に演奏している。駅のホームには和やかな空気が流れている。

マランは暴動の街ではない。マランの若者たちが癡猛だからあのような悲劇が起きたのではない。マランにはこうした穏やかな日常がある。

サッカーとロックを愛するアレマ

だからといって、マランの人びとは暴力的なだけという訳ではない。彼らに



「アレマの声」の駅前で生演奏の様子(2018年)



マラン市庁舎前の広場(2018年)



天城町前野の田植え歌(2012年)

その際は、徳之島でも奄美大島と同様に芸能を映像に残す必要がある、徳之島では、奄美大島以上に伝承が危ぶまれる芸能が少なくなく、映像化は喫緊の課題であるといった意見が寄せられた。さらに、民博が徳之島で芸能の映像取材をおこなうならば、いくらでも協力は惜しまないといった提案までいただいた。そこで、そうした提案をうけて、民博内外のプロジェクトを通じて経費を留意し、

現在の、徳之島の芸能の映像資料に関しては、撮影を一旦おいて、それらの効果的な活用に向けていくつかの試みをおこなっている。そのひとつが、ほとんどの撮影でカメラを担当してくれた故井ノ本清和氏が作成した原型をもとに、民博が進めるフォーラム型情報ミュージアムの事業の一環としておこなったデータベース化(以下フォーラム型DB)である。また、それをもとに、画面の加工などによって使い勝手を改良したマルチメディア番組(コンテンツ、以下MMC)の作成と、徳之島の芸能を簡便なタッチで紹介する映像展示の試作をおこなっている。現在、フォーラム型DBはオンラインで限定的に公開中で、MMCは民博で見ることができ、徳之島では、MMCの初期型を天城町の「ユイの館」などで公開している以外は未公開である。現在、福岡氏と同僚の寺村裕史准教授とわたしは、民博内外の研究者や現地の人びと

との協働による研究を通じ、民博の学術資源をオンラインで広く発信することを目指す、民博の人類文化アーカイブズ事業の一環として、島での公開を計画している。MMCはインターネットに接続せずに運用するので、すぐにも島内各所で公開が可能であるが、フォーラム型DBはオンラインでの運用なので、広く公開するためにはいろいろ手続きが必要となる。現在その手続きを進めていて、遠からずそれが可能になると思われる。フォーラム型DBは、アクセスした人が情報を付加できる点に大きな特徴がある。公開によって徳之島に限らず広く人びとから情報が寄せられるようになれば、そうした情報をいかに整理するかといった課題はあるものの、データの増加によるデータベースの充実が十分期待できる。そんなふうには徳之島の映像資料が「成長」する、つまり、多くの人びとの関与を通じてなかなかに育って姿を変えていくとすれば、何とも愉快である。



天城町瀬瀧のシマウタ(2011年)

国立民族学博物館(以下民博)では、同僚の福岡正太教授とわたしが中心となり、平成二二(二〇一〇)年から令和元(二〇一九)年にかけて、鹿児島県徳之島の芸能に関する映像取材を実施した。徳之島は奄美群島では奄美大島の次に大きく、天城町・伊仙町・徳之島の三町あわせて七五の集落に約二万二〇〇〇人が暮らしている。民博では、そのうち二八集落で映像取材をおこない、「夏目踊り」などの集団の

踊り、三味線を伴奏に歌われる「シマウタ」、稲作にかかわる「田植え歌」、「マンキヤアシビ」などの正月の芸能や、「十五夜」などの祭りや年中行事の映像三三一本のほか、人びとへのインタビュー、景観映像、集落のようすを紹介した番組(集落誌)など、合計三六六本の映像を収集することができた。なかには撮影した際の上演の出来に満足がいかない、もっと撮影してほしい演目があるなどの理由から、再度呼ばれ

徳之島での映像取材にかかったのである。こうした経緯で始まった民博の映像取材は、コーディネートを担当した三町の資料館や教育委員会や文化財の関係者や、撮影の際に実際に芸能を演じてくれた島内各地の集落の人びとの共同作業によって進めることができた。したがって、これらの映像資料に対して何らかの肯定的な評価が得られたとすれば、それは、まずは島内で映像取材にかかわった多くの人びとに帰すべきものであろう。

て撮影をおこなった集落もあった。民博の映像取材は、島内すべての芸能を悉皆的に撮影するには至っていないが、この島の芸能の全体的な様相がある程度理解することが可能な資料を集積できたと考えている。伝承が途絶えぬように こうした民博の映像取材は、平成一八(二〇〇六)年にわたしたちが徳之島でおこなった集



映像資料の成長 ——徳之島の芸能関係映像資料

さきはら りょうじ 民博 人類基礎理論研究部
笹原 亮二



天城町瀬瀧での踊りの撮影(2011年)

徳之島の芸能関係映像資料

資料本数: 366本
民博が徳之島でおこなった映像取材により作成した映像資料。踊りや歌などの芸能、祭りや年中行事の映像のほか、インタビュー、景観映像、集落誌などから構成される。これらの映像を解説や歌詞とともに収録したマルチメディア番組は、民博のビデオテークにて公開中である。
<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/videotheque/>



マルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」(番組番号6059)の操作画面

法の隙間

三島 禎子 民博学術資源開発センター

パリ空港の人々

原題：Tombés du ciel
1993年/フランス/フランス語/91分/DVDあり
監督：フィリップ・リオレ
出演：ジャン・ロシュフォール、ラウラ・デル・ソル、イスマイラ・メイテほか



映画のなかでゾラ少年が思い描くパリ
(フランス、パリ、2000年)



露天商で生計を立てる移民は不安定な立場にいる(フランス、パリ、2000年)



セネガルからは海外を夢見て旅立つものの書類が整っていないという理由で強制送還になる人も少なくない
(セネガル、ダカール空港、2000年)



2005年に中国の広州で出会ったマリ人男性は、着の身着のまま(写真の服)アメリカで逮捕されたという。不法滞在の知人を匿った罪である。リオレ監督の別作品「君を想って海をゆく」では、同じような状況が描かれている

飛行機から降りて異国の地に足を下ろすとき、空港は旅の期待感を象徴するような華やきに満ちた場所である。とはいえ、入管の係官にパスポートを見せて正式に入国するまでは不安がつきまとう。団体旅行では旅行会社の人が全部手配してくれて、こんな懸念は無用だが、一人で移動するときは実際にいろんな問題に遭遇することがある。わたしが経験した事件をご紹介します。

旅行者が要注意人物になるとき

コートジボワールへのトランジットでフランクフルト空港に降り立ったときのことである。飛行機を降りたために機内から出たとたん、わたしは空港警察の二人に脇を固められた。重装備の二人は警察官というより兵士のようにあり、実際そうだったかもしれない。時は湾岸戦争の真最中であった。ただならぬ雰囲気の中、無言で別室に連れてゆかれた。そして当時は大きなビジネスバッグのよ

うだったパソコンケースを机に置きと指示された。その場でパソコンがスキャンされ、わたしは爆弾所持の嫌疑から逃れたのであった。

無事、待合室に戻ると、一息つく間もなく空港アナウンスでわたしの名前が呼ばれた。航空会社のカウンターへ来いとのことである。すると、機内預かりの荷物を確認するというので、わたしは飛行機の下へ行って積み込み荷物を見せられた。なんと、わたしの名前で積み込まれたスーツケースは同じ苗字の別人のもので、本来はブラジルへ運ばれるはずのものであった。先の「嫌疑」と関係があるのかないのか、搭乗前に自分の荷物がないことがわかったのはよいが、その方も気の毒なことである。わたしの荷物は無事、数日後にコートジボワールに到着した。荷物が遅れて届くことはめずらしくはないが、行き場を見失った荷物も山のようにあるらしい。

出発できない旅行者は何者か

別の事件の舞台はパリとモスクワである。パリからモンゴルのウランバートルへ行くとき、出発便が遅れた。遅れるという情報以外になんの説明もなく、ただ待てということだった。半日経っても電光掲示板に出発便の案内はない。お腹が空

いて搭乗予定者がいらいらし始めると、航空会社から食事のふるまいがあった。お互い誰も知らないわたしたちは、空港の一角へ案内された。通常の旅行者が入りする場所ではない、何の飾り気もない空港のバックヤードであった。そのときに出されたメニューはウサギの肉である。その後、パリを出発できたものの、案内の定モスクワでは乗り継ぎ便がなく、わたしたちは航空会社の手配で空港ホテルに案内された。ただし、ふつうの客としてではなく、パスポートや航空券を預けさせられて入国も出国も自由にならない存在として、空港警察官の監視下に置かれた。ホテルのなかを自由に歩くことはできず、食事も搭乗者みんなで交渉しないことには出てこなかった。

空港の影と光

わたし自身の経験は映画「パリ空港の人々」が制作されたころに重なっていて、程度は違うものの映画のなかで疑似体験をしているような気分になった。この映画はパリのシャルル・ド・ゴール空港が舞台で、何らかの事情で法の隙間に陥ってしまった人びとが空港の隙間で生活している話である。わたしのようなふつうの旅行者でさえ垣間見ることがある空港の隙間だけに、物語は現実味を帯びてい

る。空港の係官の非情な対応も面白おかしく描かれているが、映画のテーマは無国籍者である。原題を日本語にすると「空から落ちた人々」となるが、意図せずに飛行機から降ろされてしまった人びと、ひいては、どこの国の法にも庇護されない存在を比喻しているように思える。

先月、この映画のモデルになったイラン出身のメフラン・カリミ・ナセリ氏が亡くなった。スピルバーグ監督のトム・ハンクスが主演した「ターミナル」もナセリ氏をモデルにしているという。こちらはニューヨークの空港を舞台にした恋愛もちりばめた娯楽性のある作品だが、「パリ空港の人々」では展開上は笑いを誘う場面も多いものの、その根底には怒りと悲哀、やるせなさが満ちている。

法の隙間に陥ってしまったナセリ氏が一八年間もパリのシャルル・ド・ゴール空港で暮らすことができたのは、隙間に差し込む光があったおかげだろうか。隙間をふさがなかった出入国管理局の係官のほほ笑みが見えるようでもある。

ちなみにパリ空港の滑走路には、ウサギがたくさん生息していて機内からもよく見える。わたしが食べたウサギはひよつとして空港で捕獲されたのかもしれない。映画を観ると、それがあながち妄想ではないような気がしてくる。

ゴシップが生むもの

まつい あずさ
松井 梓

環インド洋地域研究国立民族学博物館拠点 特任助教

モザンビーク島では日々ことばが飛びかう。とりわけ多く飛びかうのは、誰かについてのことばだ。誰かを笑いの種にしたり、誰かへの小さな不満や嫉妬を吐き出したりする、いわゆるゴシップとよばれることばたちが、おしゃべりな女性たちのあいだを歩きかう。間延びした時間が流れる過密した小さな島では、ゴシップは生活にうるおいを与えるほとんど唯一の娯楽なのだ。

そんな島では、「話す」という表現が、それだけで「誰かの話をする」という意味をもつことがある。以下の会話はわたしと島の女性たちとのあいだで公用語のポルトガル語でかわされたものだが、ふたつ例を挙げてみる。

みんな、話さずにはいられないのよ。そういうものよ。何を話してくれてもいい。右耳から入って左耳から出ていくからね。

みんな、話して、話して、話して。でも(面と向かって)侮蔑したり無視したりはしないの。

わたしたちの日常でも、「誰かについての話」が多く行きかっている。だが、島ではその度合いがぐんと上がる。

もちろん、外国から来た異質なわたしが島の女性たちのゴシップの種となることもある。あるとき、滞在先の家族に「アズサは金を払わない」と周囲に悪く言われていることを知った。そ

うして人びとに好き勝手に語られることに、そのころのわたしは辟易してしまっていた。それは、相手を信じたいのに信じられない怖さに起因していたと思う。飛びかうことばのなかで、わたしは相手を信じてよいのかわからず、まさに迷ってしまっていた。

今になってみれば、そうしてことばのなかで迷っていたのは、わたしが口に出されたことばを額面どおりに受け取りたがり、ことばをつうじてのみ人を信じようとしていたからだのだと思う。自分へのゴシップが飛びかうなかでも、背筋を伸ばし顎をツンと上げて家々のあいだを歩く島の女性たちの姿に比べたら、とても幼く未熟な態度だ。

ある女性は、誰かについてのゴシップをこれでもかと繰り返しても、そのターゲットの前では侮蔑したり無視したりはせず、適当に取り繕って振舞うのだと語る。日本の共同体を生きる感覚だと「結局裏では悪く言っているのだろう」と、どちらかというとながティブにとらえてしまうような気がするのだが、どうもその感覚でいては島では生きていけない。飛びかうゴシップに慣れきってしまった人びとは、「裏で何を話されているか」よりも、形式的であっても目の前で他者が示す態度のほうを軸に相手に対して振舞うのだ(もちろん自分へのゴシップに怒り傷つきもするのだが)。ことばにされたことを強く信じるのではない、いい加減で日和見主義にも見える振舞いが誰かに少しでも居場所を与えうことを、島での生活で身をもって教えられたのだった。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年3月号

第47巻第3号通巻第546号 2023年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年

3月号

編集後記

われわれはどのように記憶を残してゆくのだろうか。歴史がわれわれの記憶を物語ってくれるのかというと、史実というものは往々にして為政者の記録であり、重層的な過去を網羅的に描いたものではない。ましてや権力や体制に抵抗した民衆の記憶というものは、歴史からこぼれ落ちてしまうのが常である。それを芸術というかたちで残すのは、人類の大いなる営みだろうと思う。

芸術を記憶の媒体としてとらえる本号の特集からは、展示物の紹介に加えてさまざまな示唆を感じることができた。ペルーには紛争時代を記憶するための博物館があるという。人命を脅かすような権力の行使に抵抗する思想が根づいている証である。「抵抗権」は近代思想においては人権や自由、民主的政治を保証するための国民の権利である。

このような抵抗権が日本国憲法には制定されていない。コロナ禍や福島第一原子力発電所事故、薬害や公害など、人びとの命が危険に晒されたことを、現代に生きるわれわれはどう記憶してゆくのだろうか。(三島禎子)

次号の予告 4月号

特集「酒」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

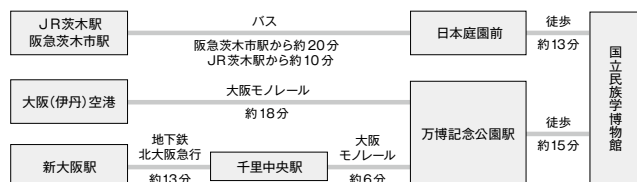
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

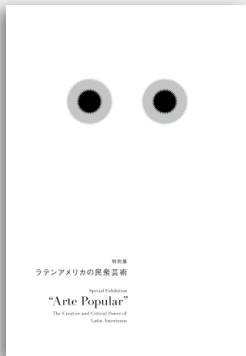
本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





国立民族学博物館 特別展図録

『特別展 ラテンアメリカの民衆芸術』

あふれる色とはじける形。ラテンアメリカの「民衆芸術」145 作品を図版で紹介。文化混淆の歴史、芸術の振興、制作者の批判精神に焦点をあて、「民衆芸術」を通じてラテンアメリカの文化的多様性を展望する。

編者：鈴木紀

発行：国立民族学博物館

本文216頁

H210mm × W145mm

ISBN：978-4-910055-07-7 C1039

2,200円（税込）

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

E-mail shop@senri-f.or.jp 水曜日定休

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ